

ティールーム

ローマで出会ったヴァーチャル精神医療資料館

みやさか けいそう
宮坂 敬造

(文学部教授)

人の背丈ほどの高さのガラス性樹脂の板が、部屋の前に仕切りのように置かれている。その様子が遠くから見えた。奥には机と椅子があるだけのがらんとした空間がある。さらに近づくと、その透明な板の中から突然、人がこちらにむかって体当たりしてくるのが見えた。上半身が裸の男性だ。それに女性も突進してくる。けれども、壁に当たって跳ね返されてしまう。と思うと、後ろから彼らの手をとって引き留める人間もみえた。拘束されて自由を奪われている人間が絶望しながらも脱出をしようとしている！そう直観した…。次の部屋<話す>に移ってほしいと館長に促され、廊下の右端の部屋に入った。そこにはマイクがあり、なにか言葉をしゃべってみるように言われた。「こんにちは！こんにちは！」とまず日本語で呼び掛けてみた。すると、その部屋の壁の部分が画面のようになり、人の唇が大写しに浮かび上がり、さまざま音が発音され、話し声がさまざまな角度から聞こえてきた。さらにひとつ隔てた左側の別の部屋に入る。すると、そこには天井から手のひら程度の大きさの釣り鐘型の金属機器が多数吊り下っている。そして、自分の声音に似ている声が多数の方向から同時に聞こえてきた。もし幻聴が聞こえるというような体験があったら、こんな感じに聞こえてくるのだろうか…？



釣り鐘機具はスピーカーになっていて、先ほどの部屋で私がマイクにむかっていろいろしゃべった言葉がスクランブルされ、方々から聞こえてくる仕組みになっていると説明をうけた。かつての病棟の食堂の空間を改変した回廊で食卓に向かうと、仮想現実メディアの映像で当時の皿や食事が出てきたり、記録帳があるのでめくると元患者の自己語りが始まったり、昔の病院風景の映像を見ることができた。

この建物はいまは資料館ムセオ・ラボラトリオ・デラ・メンテとなっているが、もとはといえば中世からの流れをくむ精神病院であり、イタリアの近代精神医学の展開とともにいろいろな治療を行ってきた歴史をもつ。ところが、精神科医フランコ・バザーリアの運動により、

1978年にいわゆるバザーリア法が国会を通過し、80年代末までに精神病院への強制入院治療は廃絶されていくことになる。イタリアでは、精神疾患をもつ人たちが自身の自発的治療要請に応える地域精神保健治療機関による外来だけの診療が主となり、2000年に至ると精神病院への入院治療は例外的事態を除き、行われなくなったのである。「それで、長年この病院で治療してきた自分は精神科医として失業したので、この資料館の館長となった」とポンベオ・マルテリ先生は冗談めかしておっしゃった。冒頭に記した3つの部屋は、精神障害の経験を仮想現実的に一般訪問者たちに体験をさせるために開発された空間であった。2000年以降、館長自身とスタジオ青（アズッロ）が共同でヴァーチャル・メディア芸術の表現方法を実験的に開拓し、精神疾患をもつ人々を一般社会が特殊視する傾向を無くすための具体的呈示法を編み出してきたのである。それゆえ、実験美術〔博物〕館と名付けられている。一部のヴァーチャル映像は俳優が演じたものから作成されているが、大部分はかつて病院で使っていた治療器具や病室などの過去の実物と、入院患者の描いた絵、バザーリア法導入以降の過去の治療法への反省に基づいて彼らに伝えてもらったインタビュー映像等々、病院の過去の文書や映像記録を反省的に再構成した資料なのである。

ヴァーチャル資料館の最後のスペースの壁には、電気ショック療法の機械装置（1938年にローマ大学の精神科医が創始して以来、この病院で使われていた）や病室ベッドなどが、風で飛ばされて消失していくイメージで、まさに「反省的」に展示されていた。この秋、ローマでの学会発表の関連で、いくつか地域医療施設を訪問する機会があり、最後に訪れたのが精神医療の歴史を保存するこの実験的資料館であった。50人ほどの高校生見学者がにぎやかに退出したあと、館長にインタビューし二人で90分ほどかけて見たのだが、まさに近未来に普及すべきアーカイヴの姿をそこに見たという思いがしたのである。